

公益財団法人
荒川区芸術文化振興財団
Arakawa City
Art Culture Promotion Foundation

▶ リンク集

文字サイズ

小

中

大

No.95 清水 正智(しみずまさとも)

診療と両立、夢は父子レース

校医も10年「活気あふれる西日暮里」

地下鉄・曙橋駅の真上、ビルの二階にある清水歯科。診療所のドアを開けると、鼻をつく消毒薬の臭いととも、一枚のカラー写真が目に飛び込んで来ました。赤いヘルメットをかぶった先生の「雄姿」です。そう、清水さんの本業は歯医者さん、そして「副業」はカーレーサーというわけです。

清水さんが自動車レースの魅力にとりつかれたのは、まだ高校生だった十八歳の時でした。ちょうどこの頃、船橋ヘルスセンターにサーキット場が完成。「友達に誘われて行ったのがきっかけになりました。十六歳で軽免許を取ってジムカーナに出たりはいたりしていたんですが、現在のように盛んではありませんでした。でもこの時、プロのレーサーになろうと決心したんです」

で、大学に進学せず、ストックカー・レースなどに出場する毎日。しかし「なかなかスポンサーもつかないし、こりゃあ、レースだけでは生活できないのでは」と、遅まきながら二十歳で日本歯科大学へ。ご両親がお医者さんという家庭に育ったこともあったのですが、歯科学生のレーサーというのがウケて、ガム会社がスポンサーとして名乗りを上げてくれる事に。

「いまも現役で活躍している高橋国光さんらに、本物の戦い方、レースのやりかたを教えてくださいました」という清水さんは、昭和五十七年フォーミュラー選手権で五位になって、一流レーサーの仲間入り。以後、六十一年富士GCシリーズ九位、全日本F2シリーズ十三位、そして平成三年のフォーミュラー45シリーズでは、チャンピオンに輝きました。

この間、死線をさまようような大事故も体験しています。四十八年に富士スピードウェイで行われたグランド・チャンピオン・レース。ローリング方式でスタートを切った直後、他車と激突して車が炎上し、大ヤケドを負いました。なんと四百五十針もぬう大手術。「いまだに物をしっかり握れなくて。まあ、左手なので仕事に支障はありませんが」

現在、清水さんは曙橋のほか、西日暮里と埼玉県三郷市の三か所で、診療所を開業しています。

生まれは福島県の白河。「でも、二歳の頃、西日暮里に越してきました。もともと住宅街なので、大きい建物といえば開成学園ぐらい。町並みはボクが子供の頃と、ほとんど同じです。ただ駅の近辺は、ものすごく変わりましたね。高いビルが建って。活気も昔と比べぜんぜん」

こんな清水さんが、いまも懐かしく思い出すのは、第一日暮里小学校の校医を勤めたこと。「四、五年前にやめました。それまで十年近く続けたでしょうか。子供の頃お世話になった方も多いのではないのでしょうか。」

「ボクは過去を振り返るのが嫌いなんです。だから体力と闘争心があるうちは、レースに出るつもりです」。四十九歳のいまも週二回のトレーニング・センター通いを欠かしません。十六種類のマシンを使った筋トレ、自転車こぎ、さらにエアロバイクと、たっぷり三時間は汗をかきます。とりあえずの目標は、来年三月からのGT選手権シリーズ出場です。

いま、清水さんは大きな夢を描いています。長男で日本歯科大学四年生の剛君と、同じレースに出場したいというのがそれ。

「剛はボクと同じように、十八歳の時からレースに出ているんです。今では年間賞金二千万円は稼ぐのでは。一度、手合わせしたいんですよ」

この時ばかりは、父親の顔がのぞきました。

読売新聞記者・岡 敬

カメラ・岡田 元章



トップ > 荒川の人 > No.95